

共同研究

梁啟超

西洋近代思想受容と明治日本

供間直樹編

共同
研究

梁 啓 超

西洋近代思想受容と明治日本

狭間直樹編

みすず 書房

序 文

梁啓超の名は、いまではそれほどポピュラーではないだろう。しかし、前世紀末から今世紀初にかけて、かれが伝統中国の近代中国への文明的転換において果たした役割は、他に比べようのないほど大きなものだった。二一世紀を目前にひかえて、世界に占める東アジアの位置がますます重きをくわえつつあるいま、梁啓超の歴史的な役割はもっと注目されてよいと思われる。

文明史的転換という点での梁啓超の功績が、西洋近代文明の受容による中国伝統文明の再造にあることはいうまでもない。「經学革命」「史学革命」「詩界革命」「小説界革命」等の提起はその明証である。十分とは言えないにせよ、梁はそれらそれぞれに進むべき方向をさし示した。そして、近代「国民国家」を創出するに必要な政治、法律、経済、哲学、宗教、教育等、いわゆる人文・社会科学のほとんど全ての分野にわたり、すぐれて高度な議論を展開した。その範圍の広さと水準の高さに驚かされるが、近代への文明史的転換にはそれだけのものが必要とされたのである。

梁啓超の生涯は、波瀾万丈にして脚光を浴びつづけた生涯だった。なかでも政治の表舞台で喝采を博したのは、一九一五年、袁世凱の帝制に反対したときである。時に梁は四三歳。火蓋は、「異なる哉、いわゆる国体問題なる者！」という一文の公表により、切っておとされた。袁は梁のこの文章を十万元で買収しようとして果たせなかったといわれる。十万元がどれほどの巨額かは、この少し前、袁が孫文暗殺に掛けた賞金が十万元だったことを想起すればよい。

労働者の月給が十元くらいの時代なのである。

「異なる哉……」の一文の公表により、輿論は一挙にもりあがった。結局、護国戦争の勃発となり、袁世凱の帝制は失敗する。漢字と文章によって統一が維持されてきた中華文明にあっては、「文章」なるものはまさに「経国の大業、不朽の盛事」だったのである。ちなみに、名文家を謳われた章炳麟のばあい、一篇の文章が「数個師団に相当する」ともいわれた。袁世凱が章を軟禁したとき、その任に当たった將軍の言である。

そのころ、梁啓超は熊希齡内閣の大臣になったこともあり、政界での地位は大変に高かった。しかし、梁の文章の影響力はそれと関わるものではなく、言論界・学術界におけるスーパースターとしての社会的声望に発していたのである。その声望とは、西洋近代文明のエッセンスを学術的に摂取紹介してその定着のための基盤整備をおこない、「民智」向上・「国民」形成の言論として普及浸透させた功績にたいしてあたえられたものだった。

言論界での名声が学術界のそれと結びついていたことは、中華民国創立当初の「ちゅうか函夏考文苑」の設立構想からも窺える。それはフランスのアカデミーを模した学術界の最高機関であって、発議者は復旦大学の創立につとめ北京大学の学長にもなる、西洋事情と洋学に通じた馬良である。馬は、そのトップの座に章炳麟・嚴復・梁啓超と自分の四人を配した。嚴復は『天演論』とともに名高い洋学（英学）の最高峰だったし、一文が数個師団云々の章炳麟は中華「宏碩壮美の学」の最後の担い手と自他ともに許す国学の大家なのである。もって、斯界での梁啓超の地位を窺うことができる。

梁啓超は一八七三年に広東省新会県で生まれた。新会は澳門の西方に位置し、南宋滅亡の悲劇の地、崖山で有名なところである。一九二九年、数えの五七歳の時に北京で病没した。けっして長いとは言えぬ生涯だが、著作は等身のもの。『飲冰室合集』（中華書局、一九三三年）に約九二〇万字を収めるが、李国俊氏の労作『梁啓超著述系年』（復旦大学出版社、一九八六年）に照らしてみても未収のものは多い。全著述は一四〇〇万字以上との推計もある。

父は「生員」にも成れずに私塾教師を生業にしたから、梁啓超は貧乏な田舎インテリの家の出である。幼時より神童の誉れ高く、一一歳で「生員」、一六歳で早くも「挙人」となる。飛び級につぐ飛び級、と言ってよい。この間に科挙むきの勉強のみならず、時流の「訓詁詞章」の学問にもはげんだ。

この道を順調に歩んだだけなら、歴史的になにほどの足跡も残さなかつたろう。しかし、転機は康有為との出会いによつてもたらされた。一八九〇年、梁啓超一八歳の時のことである。康は広東省南海県の人、梁より一五歳年上だった。時流の学問はすべて無用、との説伏に屈した梁は、すぐさま康に弟子入りをする。

それよりさき、康有為と出合う直前に梁啓超は上海で徐繼畲の『瀛環志略』を手にし、世界について開眼している。中華は世界の一部でしかなく、中華以外にも高い文明をもつ西洋の国々があることを理解したわけだ。徐は「東方のガリレオ」と称されるが、『瀛環志略』はまさに梁にとっての「地動説」だったのである。

幕末に上海の地を踏んだ日本人が西洋文明の先進性に驚倒したこと、『瀛環志略』が魏源の『海国図志』とともに日本人の世界認識に大きな影響をあたえ、維新への動きを加速したことはよく知られている。ところが、梁啓超がそれを手にしたのは刊行後四〇年以上を経たことなのである。中華文明の達成は高度であり、その重しが軀身にとつての足かせとなったことは認められねばならない。しかしそれにしても、梁啓超が中国における西洋近代文明受容のトップランナーの役割を果たすことになるのだから、中国知識人の反応はやはり緩慢にすぎた。ゆうに一世代以上のタイムラグである。

頂点に立つはずの伝統的な「中華」の観念と、自分たちが西洋の下位にあるという現実とをいかに折れ合わせるかは、清末の知識人すべてにつきつけられた大問題だった。その折衷のための代表的なパラダイムが、中華の精神を本体として西洋の技術を利用しようという「中体西用論」である。それではもちろん、解決がつかない。そこで康有為が切り開いたのが、公羊学の「三世説」を用い、伝統中華と近代西洋の文明的先後関係を統一的に把握することにより西洋受容を可能にする道としての「康学」だった。梁啓超は、中国の問題を世界のレベルで考えるための「思路」

としてそれを受け入れ、康の弟子となったのである。

一八九〇年以後の梁啓超の生涯は、大きく四つの時期に分けることができる。

第一期（一八九〇—一八九八） 一八九〇年の弟子入り後、一八九八年の戊戌変法までの、国内で変法維新運動に従事した時期、いわば「維新運動期」である。

第二期（一八九八—一九二二） 一八九八年秋の日本亡命後、辛亥革命後一九二二年に帰国するまでの、国外で改革言論を鼓吹した時期、いわば「亡命鼓吹期」である。

第三期（一九二二—一九二〇） 一九二二年秋に帰国してから、一九二〇年春にいたるまでの、大臣就任はじめ実際政治に従事した時期、いわば「民国従政期」である。

第四期（一九二〇—一九二九） 一九二〇年春から逝去までの、政界から身を引き、研究執筆・教育研究に大車輪の奮闘をした時期、いわば「文化活動期」である。

第一期には、梁啓超は康有為の説を奉じて活動した。やがてかれらの活動は全国規模の変法維新運動にまで発展した。『時務報』などにおいて新思想を説く梁啓超の文名は、すでに師の康有為を上まわったという。明治維新を手本にした戊戌「百日維新」が西太后の反撃によってあえなく潰れると、梁は、刑場の露と消えた譚嗣同を鹿児島湾に沈んだ僧月照になぞらえ、自らに西郷隆盛の役を割り振って日本へと亡命する。

第二期には、亡命した梁啓超は、ハワイ、オーストラリア、そしてアメリカと、世界各地を駆けめぐって保皇会（立憲派）の勢力拡大につとめた。孫文との提携模索、革命党との「死戦」はともにその一齣である。しかし活動の基盤は、『清議報』『新民叢報』などによる「民智」向上・「国民」形成のための鼓吹宣伝に置かれていた。清朝の立憲準備に呼応した『国風報』などの文章は提言性を強めるが、文明の「転轍手」としての高い評価はこの時期に確立さ

れる。

第三期には、梁啓超は主に政治の舞台で活動する。先には袁世凱のもとで司法総長（法務大臣）、後には段祺瑞のもとで財政総長（大蔵大臣）に就任した。また世界大戦終了後には「会外顧問」としてパリ講和会議に赴くなど、北洋時代の政府に加わって活動している。しかし、溢れるばかりの自負とは裏腹に、政権担当者としての実績に見るべきものはない。

第四期には、梁啓超は基本的に学術文化面で活動した。『清代学術概論』をはじめ、学術的な著作の多くをこの時期に執筆し、清華研究院の教授にもなった。図書館の設立、図書分類法の確立といった文化的活動も多彩をきわめる。とはいえ、政治向きの発言は庄さえきれるものではなく、基本的に自由主義的な立場から共産主義、国民革命に反対する見解を表明しつづけた。

この四時期区分はまた、梁啓超の世界主義と国家主義をめぐる思想遍歴と対応的である。そのどちらかが、梁にとつての世界観・人生観の核心であり、学理学説を構成するためのイデオロギー的な立脚点なのだった。第一期には、梁啓超は世界主義の立場に立っていた。それは当然ながら、康有為の大同思想をその内実とするものである。しかし、第二期には世界主義をすてて国家主義の立場に立つにいたる。日本で摂取したものの核心がそれだったからである。第三期も国家主義の立場は変わらない。ただ、第二期には主義はちがっても基本的には康有為の配下として行動したのだが、第三期には宣統帝「復辟」の時のように決定的な対決にまでいたる。

ところで、第三期における梁啓超自身の政治的实践は失敗し、国家主義の最高のモデルとされたドイツは敗北した。しかも、大戦後の訪欧により梁が発見したものは、文明の発達のきわみとしての「野蛮の再現」だった。かくして国家主義は動揺し、第四期にはふたたび世界主義へと転ずる。それはもちろん前と同じものではない。そこには十分に根拠を示されることのない東洋回帰志向が漂っている。しかし、それが世界主義であることは確かなのであって、かくして、梁啓超は康有為の「終生」の弟子たりえたのである。

話をもどそう。前述したように、中国近代史に梁啓超がはたした役割はきわめて大きなものだった。しかし、それに相応しいだけの研究がなされてきたわけではない。その理由は主として、梁が国民革命にも共産主義にも反対し、国民党からも共産党からも敵対的な存在とされたことにあったろう。つまり、それは中国近代史の展開そのものに規定されたことだったのである。

このような条件の下で、五〇年代の初めにアメリカのレヴェンソン氏の著作が現れた (Joseph Levenson, *Liang Ch'iao and the Mind of Modern China*, Harvard University Press, 1953)。梁啓超研究の先河である。そしてほぼ十年後に世に問われたのが、本格的な梁啓超研究の出発点とされる張朋園氏の研究である (『梁啓超与清季革命』中央研究院近代史研究所、一九六四年)。さらに十余年を要してその続編の刊行となる (『梁啓超与民国政治』食貨出版社、一九七八年)。今日からは想像もできないほど劣悪だった資料的条件だけを考えても、張氏の功績は高く評価されねばならない。そして没後はほぼ半世紀、七〇年代以降に研究はかなりの進展を見せる。大陸でも開放政策とともに研究がすすみ、やがて李喜所・元青両氏の学術的な伝記も刊行された (『梁啓超伝』人民出版社、一九九四年)。

ところで、時代的諸条件を無視してごく大雑把に言うなら、それらの諸研究は、梁啓超と日本の関係への目配りが十分でないという点で共通している。もちろん、日本亡命後の梁が日本の事物をきわめて精力的に摂取したことはよく知られたことだから、みなそれに注意していないわけではない。しかし、具体的な追究となると、やはり不十分だった。その結果、梁啓超の営為が歴史の実際から離れて過度に“主体的”なものにみなされるということも、時にあったのである。

日本では、永井算巳氏 (『清末における在日康梁派の政治活動』『信州大学人文科学論集』第一号、一九六六年) など、梁啓超の在日活動に深く分け入った研究がつとにみられた。そして九〇年代初に日本と中国で、文化的な影響関係の面を深く掘り下げた宮村治雄氏 (『梁啓超の西洋思想家論』『中国——社会と文化——』第五号、一九九〇年)、夏曉虹氏 (『覺世与伝世——梁啓超の文学道路』上海人民出版社、一九九二年) の研究が公刊された。

われわれの共同研究は、如上の梁啓超研究の展開を承けたものである。主眼を梁啓超と日本の関係に置くことにし、「梁啓超の研究——その日本を媒介とした西洋近代認識について——」をテーマとして掲げた。そのため、力点はおのずと前述の第二期、梁啓超が文明の「転轍手」としての評価を確立する時期に置かれることになった。

梁啓超が日本の軍艦に乗せられて亡命してきたのは明治三十一年秋のことで、まず東京に、ついで横浜に居をかまえた。そして、三十九年から帰国までは神戸の須磨に住んだ。維新後三十年、国家体制の骨格がほぼ固まった日本には、中国の変法維新を願う梁にとって、手をのばせば届くところに摂取すべき対象がいくらも転がっていた。かれが超人的な貪欲さでもってそれに臨んだことは、本書「付録1」からもその一端を窺えよう。

かれの超人的な活動が、個人的な資質に負うていることは言うまでもない。しかしより重視すべきは、明治日本がそれを可能にする条件を創り出していたことである。「社会」や「哲学」に代表される和製漢語の術語の体系一つを考えてみても、それは明らかだろう。もちろんイエズス会士の活動等、先行する蓄積を無視してもよいと言うのではない。しかし、明治日本のその面での達成は、量的にも質的にも、先行のものをはるかに凌駕するものだった。そして繰り返すが、それらの成果を素材として組み立てられた国家と制度、社会と文化がそこにはすでに存在しており、梁啓超はその真っ直中に身を置いたのである。

梁啓超が日本語を学んだのは来日後のことである。にもかかわらず、すぐに驚くほど多くのものを摂取し、紹介した。それを可能にしたのは、「和文漢読法」の工夫である。命名からして「漢文訓読法」の裏返しであることはすぐ分かるうが、それは「日本語の文法が分かっていたので、笑うべき誤謬がたいへん多い」と梁自身が言わねばならない態のものだった（ただ、そのことと梁の訳文の可否は別問題である）。しかし一九〇〇年に、『和文漢読法』の題で書物として公刊されると、有用な日本語即席修得書として大いに歓迎されたという。

「漢文訓読法」が歴史的に熟成させられた「重言語の体系であるのにたいし」、「和文漢読法」はインスタント療法の

域を越えるものではない。したがって、それは表面的に意味を取るのに速効性をもつにしても、異文化を根柢的に認識するための手段にはほど遠いものだった。とすれば、梁の営為は「梁啓超式の輸入」といわれる浅薄性をつねに帯びることにならざるをえない（いろいろな意味での浅薄性が、日本が受容したさいにも不可避だったことは言うまでもない）。

しかし、その「浅薄性」こそ、日本を経由して中国へ移入された西洋近代を特色づけるものだった。そこでは、「日本文の輸入」の「知層」のうえに梁啓超式の特徴をそなえた新「知層」が積み重ねられたわけで、このようにして世界近代文明の一構成部分としての東アジア「文明」圏が形成されることになる。

時代が要請していたのは、学問的に厳密な文章ではなく、中国革新のための政治的課題に奉仕する文章だった。西洋近代文明は、中華伝統文明とは異質の新しい文明なのだから、この任務の達成には、それに適した新しい文体が創出されねばならない。そのための新文体が「新民体」だった。それは、西洋近代文明を日本経由で取り込むために考案された、白話への一過渡文体なのである。この華麗な新文体でもって書かれた梁啓超の文章は、張君勳ちようくんまいの「国民の脳髓改造の妙薬」として人々に受け容れられたのであって、その結果として、かれは言論界・学术界のスーパースターの声誉をえたのである。

さて、われわれは共同研究の期間として、一九九三年四月より一九九七年三月までの四年間をかけた。班員各位の発表テーマは、『東方学報』第ハハ一七〇冊の彙報欄を見ていただきたい。またそれと並行して、島田虔次氏を中心とする有志グループにより『梁啓超年譜長編』（宇文江・趙豊田編、上海人民出版社、一九八三年）の翻訳が進められ、現在にいたっていることも記しておかねばならない。

本書には、共同研究の成果を踏まえた一三篇の論文を収めた。ここで、ごく簡単に構成と内容に触れておこう。

はじめの二篇は来日以前の梁啓超を取り上げる。竹内論文は、康梁の師弟関係が科挙及第を求めるという点にも発するものであったこと、のちの分岐と関わるズレは当初から内包されていたことを論じている。梁は及第することな

く失敗を重ねるが、変法維新の旗手と科挙制度との曖昧な関係は、かれらの出版機構、広智書局が科挙用の参考書を主な収入源としたことにまでつながろう。村尾論文は、梁啓超が康学の普及を意図しながら、他の変法諸派からは康有為との差を評価されていたということなどを手がかりに、康梁派と他の変法派との関係を克明に説き証す。自分では西学だと謳っていても、他派からは康学には西学の内実なしと見られていたし、亡命後に梁が「真理」を盾に康と分岐するのも、この時期に胚胎していたのである。

つぎに思想学術・史伝文学の項のもとに配した九編は、梁啓超の「日本を媒介とした西洋近代認識」に直接かわる論文である。狭間論文は、梁の代表作「新民説」が日本の達成に全面的によりつつ、西洋近代文明のエッセンスを国家主義ととらえて中国に投影し、「理論の理論」としての位置づけを意図したものであったことを論じる。「新民説」執筆用の筆名「中国之新民」はその独特の姿勢を示すためのものであったのである。石川論文は、アジアが西洋近代を最上に位置づける「文明」の体系に組み込まれていく過程で梁啓超が演じた役割を、関係資料の博搜を通じて解明した。バックル文明史のように日本で「常識」となった言説を梁啓超が摂取紹介していく過程の分析などは、とくに注目されよう。土屋論文では、東アジアでの「欠如態」の受容問題が注意を引く。中村正直がミルの『自由論』を訳したさいに、「ソサイエティー」を「政府」と説明したことと関連して「社会的暴虐論」の消失がおこるのだが、それは社会的結合を国家形成へと繋げようとする梁啓超の課題に適応的なことだった。

末岡論文は、梁啓超の「中国学術」の処理法をとりあげる。知識の面でははるかに勝る梁啓超が、井上哲次郎ら官学体制派を中心とする中国哲学研究の枠組みに依拠したのは、墨子の取り扱いに端的に見られるように、そこに内包された功利主義的行動原理を発揮するためだったのである。森（紀）論文は、哲学と宗教の葛藤の問題を「仏学」において検討している。清末に仏教は中国知識人によりもてはやされたが、来日後の梁啓超が依拠したのは井上田了の「哲学の宗教」であり、梁の仏教研究は基本的に日本のそれに負うものだったのである。森（時）論文は、日本において梁啓超が摂取した経済学説は、ドイツ歴史学派の国民経済確立のための学説だったことを明らかにする。スミス

を顕彰しようとしながら、歴史学派の枠組みに拠ったため、意図と裏腹の結果をまねいて攔筆に追い込まれることなど、丹念な検証により、「梁啓超式の輸入」の一つのタイプがよく理解できるだろう。

松尾論文は、梁啓超が国民精神の高揚に向けて、徳富蘇峰と民友社など、日本の史伝といかに関わったかを明らかにする。多くの依拠作品の発見は熱心な搜索の成果だが、とりわけ梁の政治思想を論じるさいに必ず問題にされる「ローラン夫人伝」が徳富蘆花に拠ったものとの指摘は重要である。齋藤論文は、中国近代文学の確立にたいする梁啓超の貢献を総合的に解明する。それは、国民の魂をつくりあげる政治小説の借用によく示されているように、明治期における「日本文学」形成の現場に立ち会ったことの直接的な成果なのであって、文学面での「転轍手」としての梁の役割を的確に分析している。山田論文は、「小説界革命」の実践面の答案として『新小説』に発表された「新中国未来記」が、末広鉄腸の『二十三年未来記』から形式・内容とも、直接的な影響を受けたものだったことを論証している。

最後に梁啓超の史的位置を論じた文章二篇を配した。井波論文は、卓越した「啓蒙」思想家とされる梁啓超の「啓蒙」がもつ時代的な意味を考察する。梁の文章が絶大な影響力をもち、パラダイム転換の舞台回しの役割を果たしたのは、産業社会に対応的な「近代的精神＝生産主義的理性」を体するものであったからなのである。中村論文は、梁啓超の〈近代の超克〉論が日本のそれとは位相を異にし、人間の全体性回復のための人文精神、ポストモダンへの回路を初発的に、かつ根元的に開いたものだったことを論じている。このような重要な問題をめぐる論議の、今後の深まりを期待したい。

もちろん、詳細は各論文を見てもらうしかないが、以上からも、明治日本の文化的達成が中国近代の文明史的転換にいかに関わっていたかを理解していただけかと思う。中国語に取り込まれた、主として学術用語としての多くの和製漢語の存在は、その明証といってよい。梁が明治日本の文化的達成をそれなりに摂取したということは、とりまなおさず、明治日本が梁を培養したということだったのである。

しかし、断るまでもないだろうが、日本の作用を一方的に、かつ過大に強調しようというのではない。作用が相互的だったことは言うまでもないし、時間的・分野的な限定性への注意もゆるがせにはならないことを承知している。ただ、われわれの設定した課題からして、ことがらのもう一方をほとんど追求できなかったことは寛恕を乞うしかない。もちろん残した問題は多いが、むしろこれが呼び水となって、議論が広がり研究が深まることを願っている。読者各位のご援助、ご教示を乞うしだいである。

本書出版にあたり、お礼を申し上げるべき方は多い。まず、外国人客員教授として来所された、フランス国立科学研究センター研究員マリアンヌ・バスチドリブルギエール、カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授ジョシュア・フォーゲルの両氏である。お二人は在所時に研究班で積極的な貢献をされただけでなく、バスチド氏は一九九五年にフランスのガルシーで、フォーゲル氏は一九九八年にサンタバーバラで、いずれも本論集と密接に関係する国際シンポジウムを開催してくださった。それらの論集も近く刊行されるはずである。なお、東方部の客員教授だったバスチド氏の論文「梁啓超与宗教問題」は『東方学報』第七〇冊に掲載されている。

つぎに、資料の提供と諸般の教示をいただいた方々として、外国では、中国社会科学院近代史研究所、中共中央文献研究室、広東省孫中山研究所、上海社会科学院歴史研究所、北京大学歴史系、中山大学歴史系、中央研究院近代史研究所の張海鵬、楊天石、曾業英、閔杰、金冲及、黃彦、方志鈞、李華興、王曉秋、牛大勇、林家有、桑兵、陳三井、黃福慶、黃自進、劉鳳翰、許文堂等の諸先生をあげねばならない。

日本ではとくに、自分の集めた梁啓超関係資料をすべて提供してくださった坂出祥伸、梁啓超関係図書残存情況調査に協力を惜しまれなかった坂元ひろ子の両先生、および多量の関連文献を寄贈してくださった東洋大学井上円了記念学術センターをあげさせていただく。

共同研究班員各位への感謝は言うまでもないが、本書への執筆者以外にも、重要メンバーだった山室信一氏が別に

論文を用意されていることは特記しておきたい。

フロッピー作成、索引作成等の作業では山田崇仁、佐原陽子のお世話になった。

最後に、本書を刊行してくださったみず書房の加藤敬事氏、編集を担当された岸本武士氏に感謝する。

一九九九年八月

狭間 直樹

目 次

序文	1
----	---

I 来日以前

梁啓超の康有為への入門従学をめぐって	竹内弘行	3
万木森々——『時務報』時期の梁啓超とその周辺——	村尾 進	37

II 思想學術

「新民説」略論	狭間直樹	79
梁啓超と文明の視座	石川禎浩	106
梁啓超の「西洋」撰取と権利・自由論	土屋英雄	132
梁啓超と日本の中国哲学研究	末岡 宏	168
梁啓超の仏学と日本	森 紀子	194
梁啓超の経済思想	森 時彦	229

III 史伝文学

梁啓超と史伝——東アジアにおける近代精神史の奔流——	松尾洋二	257
近代文学観念形成期における梁啓超	齋藤希史	296
『新中国未来記』をめぐる——梁啓超における革命と変革の論理——	山田敬三	331

IV 批評評論

啓蒙の行方——梁啓超の評価について——	井波陵一	361
梁啓超と〈近代の超克〉論	中村哲夫	387

付録

1 『新民叢報』(第1—72号)所載梁啓超文章一覧	416
2 『東邦協会公報』の受贈書目に見える『清議報』『知新報』『新民叢報』一覧	420
索引	1
筆者紹介	

I

來日以前

II 思想學術

III

史伝文学

IV

批評評論

付

録

索引

1. かならずしも網羅的ではない。基本的に五十音順配列とした。
2. 字面のわずかな相違は無視して、合併して一項目としてしまったものもある。
3. 数字の後にfまたはffとあるのは、それぞれ次のページまたは次の2ページ（もしくはそれ以上）にもその項目がでていることを示す。
4. 17-28の形のものは、その項目が論文・節等の題目に含まれていることを示す。
5. 梁啓超に関しては、主要な文章だけだが、末に〈梁啓超文章〉の項を立てて一括した。

あ行

アーガマ (阿含) 215
 アイルランド 232, 245
 赤沼智善 221
 浅原達郎 96
 朝比奈知泉 329
 アジア主義 388
 吾妻兵治 91
 アドルノ 377
 阿屯 92
 姉崎正治 201, 215, 217f, 222
 アビダルマ (阿毘曇) 216
 阿部虎之助 238
 天野為之 252
 アメリカ 89, 155
 アリスチップス 170
 アリストートル 393
 アリストクラシー (巫理斯託格拉時) 43
 有馬祐政 179
 アレン (林楽知) 54
 アンクル、トムス、カビン 309
 アングロサクソン 89, 129, 375
 安世舟 102

 イェーリング 149
 イエス伝 (ルナン) 182
 イギリス 89f
 石川安次郎 (半山) 289
 石田雄 164
 維新 81, 342, 355f
 磯貝雲峯 329
 板垣退助 306, 352
 伊太利建国三傑伝 (韓訳) 283
 伊太利建国三傑 (平田久纂訳) 264

一盤散沙 146f, 151
 伊藤博文 96, 337
 稲葉岩吉 (君山) 194f
 犬養毅 332, 355
 井上円了 202ff, 212, 217, 222
 井上馨 337
 井上辰九郎 238ff
 井上哲次郎 95, 179-181, 390-395, 398, 400
 今村仁司 386
 因果説 207
 イングラム (英格廉) 238ff
 インド (印度) 232
 インド宗教史 (姉崎正治) 201
 因縁説 219f, 222

ヴァレリー 397
 宇井伯寿 221
 ウィルヘルム二世の勅語 102
 上野格 252
 ヴェルヌ 318, 326
 ヴォルテール (福祿特爾) 114
 浮田和民 116ff
 内田魯庵 310
 内山俊彦 183
 宇宙観 (高橋五郎) 212
 ヴント 393

英国文明史 (バックル) 108, 116ff
 英国名士回天綺談 (加藤政之助) 318
 英雄 81, 258ff, 271, 277
 易新鼎 398
 エジプト (埃及) 211, 233, 235
 粵語 316
 エドキンス (艾約瑟) 230
 エピキュロス 170

遠藤隆吉 184

王学 (心学, 陽明学) 5ff, 17, 19, 95f, 177, 180, 197, 205

王覚仁 (公裕) 13

王暁秋 357

王国維 322, 325

王錫蕃 23

王修植 42f

王照 (小航) 22

王韜 26

王夫之 (船山) 195f

汪康年 (穰卿) 21, 40ff, 49, 62f, 65f, 198, 400

汪詒年 65

汪鳳藻 230

欧化主義 95, 388, 397

欧榘甲 47, 52f, 333

区建英 125

翁同龢 (声甫) 21f, 29

欧陽竟無 218

欧陽中鵠 29

大久保利通 260

大隈重信 337, 352

大塩平八郎 (後素) 96

大島晃 180, 190

大島康正 189

緒形康 130

岡本監輔 91

小川博 290

荻生茂博 95, 180

荻生徂徠 181

尾崎行雄 351

小沢栄一 126, 295

小野和子 100, 411

小野川秀美 35, 291, 374, 377, 399f

オリエンタリズム (サイード) 130

か行

外界 139, 145

海底旅行 318

回天綺談 318

械闘 11

加賀栄治 183

花間鶯 (末広鉄腸) 352f

科学 14ff, 17-28, 59

夏曉虹 124, 168, 275, 304

学海堂 5, 16ff, 32, 168, 174

郭嵩燾 37, 40, 108, 124

格致学 56, 63, 344

学長 9, 13

革命 99, 333ff, 345, 354ff, 363

革命派 86, 93, 99, 160

覚迷要録 69

学問のすゝめ (福沢諭吉) 115

何樹齡 41

夏循垵 48

柏原文太郎 332

佳人之奇遇 (東海散士) 232f, 245, 261ff, 278,

280, 296, 303f, 307, 310, 321, 328, 339, 347, 353

夏曾佑 (穗卿) 38f, 42, 53, 57, 195, 197ff, 302

学校 10, 49ff, 55, 59

桂太郎 96

何廷光 (穂田) 62f

家庭雜誌 273, 280, 292

加藤弘之 101, 115f, 172, 176f

金谷治 186, 188, 192

蟹江義丸 182ff, 390-395, 398, 400

カプール (加富爾) 260, 264, 279

カミロ、カプール (平田久纂訳) 264

蒲生君平 260

ガリバルジー (加里波リ) 264

カルボナリ (炭焼党) 265f, 268

カルマ (業) 213, 220

河上肇 253

勸学篇 (張之洞) 35, 396

漢儒学案 (康有為) 19

干涉 (主義) 155, 241, 243f

カント (康德) 202, 206, 221, 225, 337, 393, 403

韓文学 (樹園・捫虱談虎客) 13, 63, 65

韓柳の古文 325

官話 316

紀昀 49

菊池謙讓 265, 285

菊坡精舍 32

魏源 19

岸田吟香 251

ギゾー (基梭) 357

キッド (頤徳, 企徳, 器徳) 8, 30, 208ff, 222

ギディングス (潔丁士) 121

木戸孝允 260

木村泰賢 217ff

木村穀 102

救国主義 161

- 九命奇冤 (呉趯人) 317
 教育勅語 102, 185
 強学会 29, 41, 53, 197
 強学報 41
 強権 114f
 姜在彦 295
 共產主義 172
 襲自珍 (定庵) 19, 194ff
 強者の権利と競争 (加藤弘之) 101
 堯舜 7, 12, 37, 45, 212, 259, 305
 姜尚中 131
 凝然 205
 競争 85, 115, 235, 248
 曲亭馬琴 299
 挙人 5, 14, 168
 ギリシア・ローマ 43f, 57
 キリスト教 170, 175, 181, 211, 225, 401
 近世世界十偉人 (松村介石編) 261, 264, 290
 近世第一女中英雄羅蘭夫人伝 (韓訳) 282
 金聖嘆 297
 昕夕閑談 299ff
 近代的精神 = 生産主義的理性 386
 金冲及 253
 金秉喆 295

 陸羯南 115
 楠瀬正明 402
 屈原・宋玉 327
 熊沢蕃山 96
 公羊学 6, 19, 37, 200, 221
 グリーン 393
 クロムウェル (格朗訖・克林威爾) 205, 240, 281, 305
 桑木嚴翼 183, 188, 389, 393
 桑原隲蔵 118, 218, 259
 薫 313, 339
 群己權界論 (嚴復訳) 143, 163
 君権 45, 84, 90, 156, 173, 259
 軍国社会 173
 訓古詞章の学 4f
 君主 44, 142, 152f, 332
 群静重学 (スベンサー) 42
 群治 354, 363, 401
 君民共主 49

 ケアリー 233
 経国美談 (矢野龍溪) 296, 307, 310

 経済 (学) 235, 252
 経済学原論 (河上肇) 253
 経済学史 (井上辰九郎) 238
 経済学史講義 (コッサ) 238
 経済特科 27
 形質の文明 111f
 啓蒙 361-386
 啓蒙の弁証法 377, 381
 ゲエテ (機埃) 126
 華嚴宗 195ff
 桀紂 212
 権 43ff, 175f
 兼愛主義 171ff
 限界効用学説 231
 阮元 (伯元) 5, 19, 168
 兼士 174
 原始仏教思想論 (木村泰賢) 217, 219, 222
 嚴紹璽 104, 184, 186
 兼善主義 201
 嚴復 (幼陵) 22, 27, 38, 40, 42-48, 54, 62, 67, 207, 221, 234, 237,
 原富 (嚴復) 236
 言文一致 (物集高見) 324
 憲法 57
 權利 132-167, 272, 375
 — 競争 149f

 胡惟賢 40
 胡惟志 (仲遜) 198
 公 115
 康学 40, 49ff, 59, 66
 光学 198f
 広雅書院 31f
 広学会 53, 209, 230
 孔教 27, 205f, 221, 243, 405
 — の六大主義 201, 224
 合群 6, 41, 85, 144-151, 164
 黄興 196
 康広仁 (幼博) 11, 63, 65
 黄克武 103, 162
 孔子 46, 58f, 67, 170, 176, 181, 382, 392
 — 改制 6, 17, 28, 37f, 41, 57ff, 66f
 — 紀年 41, 51, 64
 孔子改制考 (康有為) 7, 37, 41, 61, 174, 193
 孔子研究 (蟹江義丸) 181-184
 孔子論 (山路愛山) 183
 広時務報 62f

公車上書 14, 24, 26f
 黃繡球 (頤頊) 317
 黃遵憲 (公度) 40f, 63, 82, 85, 113, 327
 黃紹箕 (仲弢) 21
 孔祥吉 32
 孔尚任 327
 洪水禍 (雨塵子) 317
 皇清經解 32
 黃宗智 (ホアン) 133, 136ff, 143f
 光緒己丑恩科広東闈墨 34
 康同薇 63
 公德 81, 85, 93f, 96
 江南製造局 38, 230
 江標 (建霞) 21, 52
 高鳳謙 63
 稿本 希臘史 (浮田和民) 130
 康有為 (長素, 南海聖人) 3-36, 37, 40ff, 57, 60ff, 81, 84, 133, 169, 174, 195, 197, 199, 201f, 204, 232, 302, 331f, 342, 344, 398ff
 公理 48, 368-377
 功利 (主義) 95, 172, 176, 180, 185, 187, 212
 孔老南北派說 117f
 紅樓夢 301, 321f, 326
 紅樓夢評論 (王国維) 322
 公論報 50
 古学派 390f, 400
 吳嘉瑞 (雁舟) 40, 198
 顧頡剛 192
 国故整理運動 214, 222
 国体 234-237, 247, 250
 国恥意識 301
 国府種徳 259
 国富論 (スミス) 237, 243
 国民 83-85, 97, 100, 112ff, 153, 159, 367
 —の精神 364
 —教育 371
 —競争 376
 —経済学説 245
 —国家 86, 185, 205, 213, 221f, 229, 245ff, 323, 401
 —文学 310ff
 国民新聞 118f, 126
 国民之友 118, 307f, 311
 吳敬恒 102
 吳趼人 317f, 322
 吳恒煒 63f
 吳樵 (鉄樵) 41, 49, 63, 197, 199

古城貞吉 52, 66, 315
 互助主義 248
 個人 (一個人, 各箇ノ人, 箇人, 小己, 自, 人民一箇) 81, 92, 133f, 137f, 140ff, 154, 159, 161ff, 245
 胡適 106, 184, 214, 322f
 五大洲中海底旅行 (大平三次) 318
 国家 83-85, 88f, 135
 —主義 36, 81, 82ff, 92f, 95, 98f, 154f, 161, 173, 182f, 185, 213, 233, 235, 246ff
 —主權論 103, 138
 —人格 138, 160
 —有機体説 86, 91f, 160, 243
 国家学 (吾妻兵治訳) 91, 163
 国家論 (德国伯倫知理著) 8, 91
 国家論 (平田東助・平塚定二郎訳) 91, 163
 国権 83-85, 92f, 98, 115, 133ff, 139, 156-160, 161
 —救国論 133, 160
 —小説 233
 Kockum, Keiko 357
 コッサ (科莎) 238ff
 コッシュート (噶蘇士伝) 277, 288
 古典学派 (経済学) 231f, 236ff, 243ff, 250
 吳德瀾 (李清) 41, 197
 湖南時務学堂 39f, 55f, 64ff
 コペルニクス (歌白尼) 154
 固有の旧道徳 93, 95
 胡林翼 196
 コルベール 240
 語録 325
 コロンブス (哥倫布) 334
 近藤邦康 69
 根本仏教 (姉崎正治) 217

さ行

蔡鈞 102
 蔡元培 61, 389
 西郷隆盛 (南洲) 96, 260, 290
 西国立志篇 (中村正直) 137
 崔述 185
 斎藤毅 124
 崔東壁遺書 192
 阪谷芳郎 238
 坂出祥伸 101, 184, 186, 188
 坂本武人 292
 雀部顕宣 393
 佐治芻言 (フライヤー) 230

- 佐藤慎一 70, 123, 252, 294
 佐藤信夫 293
 佐藤豊 188
 佐野公治 19
 サルジニア (撒的尼亞) 266
 算学 197, 199
 三綱 85
 三国志演義 299, 301, 340
 三聖 47
 三世説 7, 44, 47, 51, 64, 124, 136, 152f, 200, 230, 232, 244, 250
 三世兩重の因果説 200

 刺 313, 339
 私 115
 シヴィライズド (色維来意斯得) 109
 ジェヴォンズ 231
 シェリング 225
 慈恩窺基 216
 詩界革命 333ff, 345, 354, 363
 史学 5ff, 17, 95
 史学原論 (浮田和民) 116
 史学通論 (浮田和民) 116f
 志賀重昂 117f
 自強軍 49, 64
 閑谷学校 357
 資生 (学) 235, 251
 四聖画像 202
 死生観 195, 208-214
 自然的自由主義 239
 自然淘汰 150, 210, 354
 思想連鎖 107, 123f
 自治 36, 85, 140, 371
 七国新学備要 (リチャード) 53
 実事の理論 83, 100, 103
 十進分類法 396
 実利主義 171f
 私徳 93-98
 支那 312, 345
 支那内学院 218
 支那文学史 (古城貞吉) 315
 支那文学史 (笹川種郎) 315
 支那文明史 (白河次郎・国府種徳) 259
 品川弥二郎 324
 柴四朗 (東海散士) 124, 232f, 303
 死は進化の母 210
 師範学校 52

 四部分類 301, 304
 資本主義 248, 388
 島田虔次 68, 75, 104, 197, 224, 294, 356
 市民 97, 134
 —社会 245
 —的自由 140
 時務三論 (独醒居士) 129
 時務報 37-75, 82, 197
 下関講和会議 21
 釈迦 181
 社会 (群, 仲間連中) 50, 85, 137f, 141ff, 164, 401f
 —的暴虐 140ff, 144-151
 —と政府の混同 163
 社会主義 175, 243f, 248
 社会進化論 85, 114f, 145, 149, 222
 社会の進化 (キッド) 209
 釈迦牟尼伝 (井上哲次郎) 182
 ジャコバン派 (山岳党) 275, 277
 ジャンヌ・ダルク 205
 上海 40-42
 朱一心 (蓉生) 31
 自由 (自繇) 92, 111, 132-167, 335f
 —競争 243
 —主義 236, 241f, 306, 388
 —主義経済学 230
 —貿易 231ff, 236
 —民権運動 157, 350
 己の—を放棄する罪 149f
 奴隷の— 148
 人の—を侵す罪 149
 文明の— 151
 自由原理 (馬君武) 163
 自由新聞 306
 自由之理 (中村正直訳) 137ff, 144
 自由論 (ミル) 136f, 139-144
 シュウォルツ 164
 十九世紀末世界之政治 (ラインシュ) 121, 242
 宗教 171, 202, 206f, 221f, 401
 宗教改革 205
 周恩来 253
 周作人 322, 326
 周時経 283
 重商主義 239f, 244, 249
 集団主義 134, 147, 162
 十二因縁観 220
 重農学派 239, 249

戢翼輩 291
 儒教 170
 主権 140
 種源論 (ダーウィン) 226
 朱子 324
 朱次琦 (九江) 15, 344
 種族革命 132
 シュライエルマッハー 225
 荀子 201
 醇親王 20
 小我 146f
 章回小説 298, 317f
 蔣貴麟 31
 小康 176, 201
 常識 375
 蔣俊 127
 小説 297-313
 小説界革命 296, 303, 319, 322, 332, 338-340, 346, 354, 363
 小説神髓 (坪内逍遙) 307
 蔣智由 (觀雲) 90, 346
 浄土宗 196, 199
 少年中国之少年 82, 350
 小農制度 248
 章炳麟 (太炎) 40ff, 127, 169, 197f, 223, 356
 湘報館 66
 蔣方震 (飛生) 103
 成唯識論述記 196, 218
 将来之日本 (徳富蘇峰) 126, 280, 308, 334
 ショーペンハウエル 221, 322
 徐勤 (君勉) 13f, 41, 64, 200
 徐仁鏞 (硯父) 21
 徐桐 (蔭軒) 21, 23ff
 書目答問 (張之洞) 193, 396
 白河次郎 259
 自立 371, 375
 ジロンド派 (狄郎の士党) 275, 277
 浸 313, 339
 進化 111, 120, 136, 172, 367
 —史観 85ff
 —論 8, 47, 150, 170, 178, 195, 207, 208-214, 374, 399
 新学 39, 56, 197, 221, 319, 343
 仁学 (譚嗣同) 42f, 46, 104, 144, 196f, 206, 344
 新学偽経考 (康有為) 7, 9, 24, 41, 61, 64
 人群進化論 (キッド) 208f
 紳権 156, 160

人権 149, 371
 人口論 (マルサス) 370f
 沈国威 124
 新古典学派 231
 申采浩 (丹齋) 283ff, 288, 295
 新重商主義 245
 真珠取りの潜水夫 231
 新小説 278, 304, 309, 313ff, 320ff, 326ff, 340, 362
 新小説 (日本雑誌) 309
 尽性主義 384
 人生哲学 (リー) 212
 沈曾植 (子培) 21
 紳智 156
 新知識之雜貨店 229
 新日本之青年 (徳富蘇峰) 308
 真如 225
 新文化運動 214
 新聞売子 (菊池幽芳) 318
 進歩史観 109, 232, 244
 人民 135-144, 152f
 新民叢報 80ff, 106, 119f, 212, 258, 281, 362
 心理学実験室 217
 人類学一斑 (高橋五郎) 212
 新歴史学派 253
 水滸伝 297, 301, 326, 340
 鄧代鈞 53, 66
 末広鉄腸 (重恭) 303, 350-353, 357
 杉原四郎 252
 杉山重威 251
 鈴木貞美 290
 鈴木修次 124
 スチープン 393
 ステッド 219
 スビンザ 206, 225
 スベンサー (斯賓塞) 42, 119, 200, 206f, 210, 225, 323, 365
 スミス (斯密) 154, 231, 237, 239ff, 243
 西域之仏教 (羽溪了諦) 215
 西学 5ff, 17, 40, 44, 46ff, 55ff, 95, 399
 聖学党 291
 聖学会 64
 清議派 21
 清議報 81f
 聖教 56f, 301

生計学 172, 251, 369f
 生計学説 (李豊鎬) 252
 政治小説 233, 303f, 306f, 310
 静思余録 (徳富蘇峰) 126, 260
 精神 90, 213
 —の文明 111f
 盛世滋生人丁 371
 盛宣懷 40
 生存競争 132, 145, 147f, 150
 井田 68
 青年イタリア党 (伊太利青年) 265ff, 279
 政府 87f, 99, 113, 135ff, 155, 164, 166
 西洋上古史 (浮田和民) 127
 世界古今名婦鑑 (徳富蘆花編) 273ff
 世界主義 84, 99, 101, 173, 200, 206, 222, 233,
 236, 241, 249f, 410
 世界の末日 (徳富蘆花) 292
 雪中梅 (末広鉄腸) 310, 352f
 説部 300f, 318, 323
 先時の人物 260
 禅宗 195ff, 199, 214
 善の研究 (西田幾多郎) 392, 394
 センブル 128
 善隣訳書館 91

 宋元学案 19, 197
 曾國藩 35, 196, 290
 莊子 30f, 213
 宋恕 (存礼・燕生) 40f, 198f, 264f
 宋仁 361
 曹泰 (著偉) 13
 宋明理学 15, 170
 送門人梁啓超任甫入京 (康有為) 16
 族民資格 97
 ソクラテス (梭格拉底) 202
 孫毓汶 20
 孫詒経 23
 孫詒讓 49, 174
 孫家鼐 (燮臣) 21
 孫康合作 3, 332-335, 355
 孫宝瑄 (仲愚) 41, 47f, 63, 198f, 318, 401

た行

ダーウィン (達爾文) 114, 154, 209, 226, 365
 ダーヅリン 204
 大我 146f
 大学三綱領 81

大韓自強会会報 251
 大韓毎日申報 282
 代議制度 248
 太極 225
 戴鴻慈 96
 大乘起信論 196, 198
 —論争 218, 407f
 大乘哲学 (井上円了) 225
 大乘非仏論 214, 216, 218
 泰西新史攬要 (リチャード) 47, 53
 泰西文明 372
 泰西文明と泰東文明の結婚 372, 398
 泰西文明原理 (キッド) 208
 体操 56
 大同 6f, 14, 17, 27f, 41, 47, 58, 64, 66, 84, 143,
 176f, 182, 200f, 232, 234, 331, 337, 342, 384,
 409f
 大同学 (リチャード) 209
 大同書 (康有為) 7, 46, 399
 大同訳書局 55
 太平天国 9
 太陽 190, 280, 290, 310, 317
 太陽黒点と景気循環 231
 高須芳次郎 293
 高瀬武次郎 177, 183f
 高田早苗 129f, 242
 高橋五郎 212f
 高橋亨 169, 177, 184
 高山樗牛 310
 田口卯吉 116
 竹越与三郎 281
 印度仏教思想史 (橋惠勝) 215
 田中彰 291
 譚嗣同 (復生・壮飛) 11, 29, 38, 40, 42f, 46, 57,
 62, 64, 66, 195ff, 206, 213, 223, 344, 398f
 譚汝謙 290
 男女交際論 (福沢諭吉) 114
 団体の自由 115, 150f
 ダンテ 327
 探偵 (黒岩涙香) 318
 端方 96f

智識世界第二革命 308
 知新報 47, 60-65, 66
 地人論 118
 地的環境と人生 (小田内通敏訳) 128
 チャールズ=アルベルト 268

- 中国 312
 — 魂 82, 211
 — と西洋の文化的融合 384
 — の国体の歴史的特質 250
 — 文学 314f
 国家としての — 84, 88
 中国之新民 79, 80-83, 93-98
 中国文学史 (林伝甲) 315
 中体西用観 396
 中等社会 97
 中等東洋史 (桑原隲蔵) 259
 張蔭桓 (樵野) 21
 張謇 (季直) 22
 張元済 48, 63
 張瀨 (チャン) 133, 137f, 164, 292
 張之洞 (香濤) 6, 21, 29, 36, 41, 49, 59, 100, 198, 396
 張薔芬 9ff
 張相文 119
 張鼎華 (延秋) 6, 20, 22, 29
 張朋園 103f, 193
 長興學記 15, 38f, 48, 55, 64f
 朝鮮王国 (菊池謙讓) 265
 朝廷 88, 166
 地輿學 66
 地理學 (志賀重昂) 117
 地理環境之影響 (陳建民訳) 128
 地理決定論 107, 116-119, 122
 陳寅恪 37, 40, 48
 陳漢才 31
 陳虬 (志三) 22
 陳繼儼 63, 65
 陳三立 37, 40
 陳千秋 (通甫・礼吉・随生) 4ff, 8-13, 17
 陳独秀 122
 陳範 (蛻庵) 320
 陳宝箴 36f, 40

 痛史 (吳趸人) 317
 通俗國權論 (福沢諭吉) 103, 115
 塚越芳太郎 (停春楼主人) 120
 網島栄一郎 (梁川) 192, 393
 角田柳作 209
 坪内逍遙 (春廬屋臘) 292f, 295, 305, 351

 提 313, 339
 帝國主義 115, 116-119, 122, 150, 155, 159f, 249
 帝國主義 (独醒居士) 121
 帝國主義の理想 (浮田和民) 121
 帝國主義論 (ラインシュ) 121, 129, 242
 丁汝昌 179
 ディズレイリ 306
 定命説 170, 172
 デカルト (笛卡兒) 114
 狄考文→マティア
 適者生存 209f, 379
 狄葆賢 (平子, 楚卿) 320, 323, 326, 349
 手代木有児 289
 哲学 202f, 207
 哲学一話 (井上円了) 202, 206
 哲学一朝話 (井上円了) 202
 哲学館 202, 217
 哲学道中記 (井上円了) 202
 哲学要領 (井上円了) 202
 哲理經濟学史 (イングラム) 238
 デビズ 219f
 デモクラシー (德謨格拉時, 公産, 合衆) 43, 134, 182
 デューイ 184, 393
 天 169ff
 天演 87, 89
 天演論 (嚴復) 40, 42f, 46, 61, 144, 200, 207, 221
 天下為公 182
 天則百話 (加藤弘之) 188
 天台宗 195
 天賦人權 152, 157
 電術奇談 318

 ドイツ 89f
 東欧女豪傑 (嶺南羽衣女土) 317, 348
 湯學智 253
 桃花扇 320f, 327f, 340
 東京専門学校の教科書 117
 湯顯祖 327
 統合的規律 118f
 東西文化及其哲学 (梁漱溟) 406
 湯志鈞 31, 69
 唐振常 68
 同人団練局 9ff, 26
 唐振超 63
 道德 81, 101, 171, 364
 東文 (日本語) 52, 63, 66, 113, 236
 東洋大学井上円了記念學術センター 228

戸川芳郎 180, 186
 德国学校 (ファーベル) 53
 毒蛇圈 (周桂笙) 319
 読書要略 (葉瀚) 49
 独醒居士 121, 129
 特操 143
 徳治主義 182
 徳富蘇峰 115, 124, 126, 260, 280, 285, 288, 293, 304
 徳富蘆花 292f, 318
 独立 (自尊) 92, 114, 364
 杜鋼健 133
 屠仁守 (梅君) 6, 21
 土地国有 246, 253
 杜甫と彌耳敦 (徳富蘇峰) 306
 富永仲基 218
 外山正一 208, 210, 222
 トラスト (托辣斯) 253
 トルコ (土耳其) 109, 232
 トルストイ (託爾斯泰) 114
 ドンジュアン (バイロン) 344

な行

内界 139, 145
 内藤虎次郎 (湖南) 91
 中江兆民 293
 中江藤樹 96
 中島泰蔵 393
 中島徳蔵 393
 仲間連中→社会
 永峰秀樹 357
 中村忠行 252, 292, 353, 357
 中村正直 124, 137, 203, 293
 ナポレオン (那翁) 260, 265, 382
 南海之激浪 (末広鉄腸) 303
 南学会 66
 南条文雄 196, 412
 南北アメリカ華僑あと書簡 (康有為) 280

西周 293
 西晋一郎 393
 西田幾多郎 389f, 392, 394, 403f, 409
 二十三年未来記 (末広鉄腸) 351
 二十年目睹之怪現狀 (吳趸人) 317
 二十世紀新論十種 (渡辺為蔵編) 126
 日曜講壇 (徳富蘇峰) 126
 日露戦争 179

日清版權同盟 252
 二年間の休暇 (ヴェルヌ) 326
 日本 51, 80, 89-93, 302, 401
 —文学 315
 日本学校章程三種 (古城貞吉) 52, 54, 66
 日本古学派之哲学 (井上哲次郎) 181
 日本国志 (黄遵憲) 113
 日本書目志 (康有為) 31f, 202, 212, 251, 280, 303, 329
 日本哲学会 201
 日本の帝国主義 (浮田和民) 121
 日本陽明学派之哲学 (井上哲次郎) 180
 日本倫理彙編 183, 390f, 393, 400
 二勇少年 (桜井鷗村) 318
 ニュートン (奈端) 56, 58
 任公 82, 174

ネイサン 134

は行

バーバリアン (巴爾比里安) 109
 ハーフ (哈甫) 109
 パーリ聖典協会 215
 バーリン 134
 稗史 298, 318
 ハイデッガー 397
 バイロン 327
 バウム 393
 パウルゼン 393
 破壊 (主義) 85, 94f, 165
 博愛主義 173, 177f
 ハクスレー 42, 231
 麦仲夏 (瓊斎) 320
 博文書館 282f
 博包主義 201
 麦孟華 (儒博, 曼殊) 13f, 17, 41, 318, 320, 322
 バクセル世界文明史 (西村二郎訳) 128
 白話 (文学) 322, 326
 馬氏文通 (馬建忠) 40
 橋本雅邦 203
 バスチド (巴斯蒂) 101, 163, 202, 246
 バックル (博克爾) 108, 116ff, 121
 八股文 18, 26f
 八宗綱要 205
 拔本塞源論 (王陽明) 95
 馬場辰猪 295
 バラモン (教) 200, 211, 221

- 針生清人 228
 馬良 40
 ハンガリー 261f
 万国公報 53f, 209
 万国公法 115
 万国興亡史(松村介石) 291
 万国大同主義(時代) 85, 259
 万国太平洋會議 341
 潘祖蔭(伯寅) 21
 万法精理(張相文訳) 119, 357
 万木草堂 9, 13-17, 38, 197, 399

 比較生産費説 232
 東本願寺上海分寺 224
 常陸丸 179
 畢沅 189
 日原利国 189
 平等閣筆記(狄葆賢) 349f
 平田久 264, 267ff, 285, 290

 フィヒテ 225, 393
 馮鏡如 332
 馮桂芬 26
 馮自由 332
 フォーセット 230
 附会説 44f, 52
 深作安文 393
 不可知(論) 200, 206f
 福沢諭吉 92f, 108, 111-115, 116, 122, 133, 137, 252, 293
 服従 149
 富国学 231, 251
 富国策(汪鳳藻訳) 230
 富国養民策(エドキンス訳) 230f
 藤井建治郎 393
 藤岡喜久男 33
 藤田豊八 117f, 128
 武士道 90, 179-181, 211f, 392
 武士道叢書 179
 藤村操 211
 浮城物語(矢野龍溪) 308
 二葉亭四迷 308
 仏教 170, 211, 215, 401
 仏教概論(金子大栄) 215
 仏教活論序論(井上円了) 202, 212
 仏教新解(高橋五郎) 212
 仏教心理学(井上円了) 217

 仏国革命の花(徳富蘆花) 273
 フッサール 397
 船山信一 185, 189, 411
 部民 86f, 97, 159
 麓保孝 32
 冬宮の怪談(徳富蘆花) 318
 フライヤー(傅蘭雅) 38
 プラグマティズム 184
 プラトン 225
 フランクリン 154
 フランス 89
 — 革命 277, 335f
 ブルンチュリ(伯倫知理) 8, 30, 86f, 91f, 115, 133, 138, 154f, 160
 フロイト 397
 文界革命 333ff, 345, 354, 363
 文学観念(近代) 296-330
 文学極衰論争 309
 文学興国策(アレン) 53
 文興報 333
 文廷式(道希) 21
 文明 43, 45, 85, 87, 106-131, 136, 155, 234
 文明史(魏易) 126
 文明論之概略(福沢諭吉) 108, 112ff, 357

 平準(学) 251
 平天下主義→世界主義
 平民主義 335
 平民主義与帝国主義(ギディングス) 121
 平民政治 368
 ヘーゲル(黒格爾) 119, 206
 ベーコン(培根) 114, 154
 關韓(嚴復) 49
 別府淳夫 397
 ベルグソン 214
 ベルシャ(安息) 109, 235
 ベンサム(邊沁) 172, 176, 187, 210
 ベンヤミン 257

 保育主義 243
 法治主義 182
 放任(主義) 155, 241, 243f
 法門 175
 墨学の総綱領 171
 墨子 175
 墨子問詁 174
 墨子哲学(高瀬武次郎) 169-178

繆荃孫(小山) 60
 保皇 3, 132
 保護主義 231, 241ff
 星野恒 182
 ポスト・モダン 387, 410
 細野浩二 125
 没自の主我心 208, 222
 法相宗 195ff, 216f
 ホップズ(霍布士) 8, 173
 ホメロス 327
 ホルクハイマー 377
 ボルンハック(波倫哈克) 155
 本館附印説部縁起(嚴復等) 302

ま行

澳門 62f
 マジャーレ 261
 マゼラン(瑪賽郎) 334
 町田三郎 180, 186, 190
 松尾尊允 130
 マッケンジー 393
 マッチーニ(瑪志尼) 81, 260, 264, 277ff, 312
 松村介石 261, 265ff, 285, 291
 松本文三郎 184
 マティア(狄考文) 54f, 58
 マリオット 270
 マルクス主義 243
 マルサス 370
 丸山真男 125, 357
 マンチェスター学派 241

 水内俊雄 128
 水野直樹 295
 源昌久 128
 源了円 104
 峰島旭雄 190
 宮崎市定 33, 128
 宮崎湖処子 292, 294
 宮崎寅蔵 332
 宮村治雄 130, 168, 252
 ミュリアヘッド 393
 ミュステルベルト 393
 ミリセント 251
 ミル(彌勒) 133, 137, 139-151, 172, 210, 337
 ミルトン(彌耳敦) 305f, 327
 ミルトン論(マコーレイ) 305
 民権 45, 49, 64, 81f, 83-85, 90, 92f, 98, 100, 133,

152, 156f, 160, 162, 165, 368
 —救国 133, 144, 160
 —主義 93
 民主 44ff, 49, 67, 132, 139, 151-156, 161, 165, 388
 明儒学案 96, 197
 民族建国問題 151
 民族主義 86f, 92, 120f, 242f, 259, 328, 364, 371, 373
 民族帝国主義 86f, 92, 120f, 242-246, 250, 259
 民智 49, 82, 100, 132, 136, 153, 156, 159f
 民報派 253
 民主主義 248
 民約 86, 136, 145, 157, 173
 民約論(ルソー) 138, 153ff, 243, 337, 357
 民友社 120f, 304
 —の史伝 277, 281, 288, 292

無我説 222
 無邪堂答問(朱一心) 37, 47
 村田雄二郎 294
 村山吉弘 183

明治維新 90, 342, 354
 メキシコ(墨西哥) 110, 235

孟子 30, 43, 170, 174, 201, 249
 孟祥才 223, 383
 毛沢東 79, 106, 162
 物集高見 324
 望月信亨 406
 モナーキー(滿那棄) 43
 森田思軒 280, 291, 326
 諸橋轍次 183
 モンテスキュー(孟德斯鳩) 119, 129, 154

や行

夜警政府論 137f
 耶蘇教→キリスト教
 柳田泉 289, 291, 357
 柳文章 164
 矢野文雄(龍溪) 124, 293, 308
 山折哲雄 228
 山上万次郎 118
 山路愛山 119, 127, 183f, 310
 山下重一 163
 山下龍二 177, 182f, 186

山田央子 101
 大和魂（日本魂） 82, 211
 山室信一 91, 123
 山本正義 63
 唯識学 197
 熊希齡（秉三） 22, 96f
 熊月之 165
 轅軒今語（徐仁鏞） 45, 55
 ユーゴー 306
 幽室文稿（吉田松陰） 20
 熊十力 405
 熊純如 43
 優勝劣敗 87, 115, 132, 145, 147f, 150, 209, 373
 有神哲学（高橋五郎） 212

葉湘南（寛邁） 65
 葉瀚 49, 61
 葉乾坤 251, 294
 容閔 38, 40
 楊自超（葵園） 400
 楊朱 170, 178, 212
 楊深秀（漪川） 11
 楊度 90, 212f
 楊文会（仁山） 196f, 399f
 楊墨哲学（高瀬武次郎） 169, 183
 欧羅巴文明史（ギゾー） 357
 翼教叢編（蘇輿） 35, 69
 横井小楠 305
 吉田松陰 20, 81, 96
 吉田松陰（徳富蘇峰, 王純訳） 290
 吉田正信 292
 吉本襄 95
 余立新 346

ら行

ラインシュ（霊綏） 121, 242
 楽群 56f, 65
 羅在田（光緒帝） 341, 343
 羅振玉 128
 ラテン語 40
 羅普（孝高） 317f, 346-350
 リー 212
 リード（李佳白） 53f
 リカード 232
 李喜所・元青 163, 376, 383f

李惠京 180, 184
 李鴻章 21, 26, 198
 李国俊 236
 利己主義 170, 177f, 180, 185
 理財説（金成喜） 251
 李在銃 295
 李贄 297
 李生 361
 李沢厚 222, 396
 利他主義 172ff, 176, 178
 李端棻（苾園） 24, 28
 リチャード（李提摩太） 38, 53f, 209
 立憲君主制 342
 李智儔 63
 李文田（若農） 24f
 劉光蕓 64
 劉興華 165f
 劉古愚 34
 劉宗周 96
 龍沢厚 34
 劉植麟 63
 梁作霖 41
 梁漱溟 404f
 梁鼎芬（節庵） 20, 49
 廖平（季平） 21, 30
 理論の理論 83, 88, 100, 103
 リンカーン（倫古龍） 205
 林旭（暉谷） 11
 林紓 327
 輪廻説 213, 219, 222
 倫理学書解説 393
 倫理学（パウルゼン） 182

ルイ、コッスート（石川安次郎） 261ff
 ルソー（盧梭, 婁騷, 路梭） 8, 81, 86f, 138,
 152ff, 173, 236, 243ff, 260, 274f, 336f

靈魂の滅不滅 211f
 蘆勺居士 299f
 礼智主義 182
 レーニン 248
 歴史学派（経済学） 237-242, 243ff, 250
 歴史哲学 367
 歴史哲学（ヘーゲル） 116
 列国歳計政要 62
 レッセフェール 240, 243
 レベンソン 133, 412

労働価値説 231
 蠟山政道 102
 朗蘭夫人の伝 (春廻屋臘) 292
 露国の自由思想 (ウォルコウスキー) 126

わ行

倭仁 49
 ワシントン (華盛頓) 104
 和辻哲郎 221
 ワット (瓦特) 56, 58

梁啓超文章

愛国論 84, 162
 亞洲地理大勢論 127
 意大利建国三傑伝 264-272, 279, 288ff
 烟土披里純 39, 126
 印度之仏教 219
 欧州戦役史論 246
 欧州地理大勢論 127
 欧遊心影録 383-386, 398, 410
 開明專制論 96, 133, 155, 245, 277f, 379
 佳人奇遇 339
 管子伝 245, 249
 祈戦死 90, 211
 近因遠因之説 113
 近世第一大哲学康德之学説 204, 403
 現今世界大勢論 129
 孔子 181ff
 古議院考 43f, 51f
 国民十大元氣論 (一名文明之精神) 111ff
 国家学綱領 86
 国家思想變遷異同論 85, 242, 259
 噶蘇土伝 258-264, 269, 280
 三十自述 4, 125, 162, 223
 史記貨殖列伝今義 231
 子墨子学説 169-178
 釈草 353, 355, 363
 自由書 83, 111ff, 126f, 139, 175, 335-338
 松陰文鈔 96, 99
 商会議 84, 166
 少年中国説 166, 311
 新史学 67, 364, 366, 373
 清代學術概論 30, 49, 176, 181, 194, 362f, 391, 400, 407
 新中国未来記 165, 278, 296, 317, 331-358

新民説 79-105, 115, 165, 235, 242, 259, 364, 381, 402
 西学書目表 48f, 53, 55, 60f, 230
 生計学学説沿革小史 237, 239, 241, 364, 369
 積弱溯源論 82, 122, 165
 説群 43, 61f, 165
 節本明儒学案 96, 99, 180
 先秦政治思想史 248ff
 大乘起信論考証 406
 論中国宜講求法律之学 110
 中国魂 90
 中国專制政治進化史論 366, 368
 中国地理大勢論 127
 中国之武士道 179, 212
 中国立国大方針 243
 中国歴史研究法 406
 中国歴史上人口之統計 364, 370
 中西学門徑書七種 55, 58
 地理与文明之關係 117
 德育鑑 96, 99
 読異部宗輪論述記 216
 德国伯倫知理著国家論 86
 読春秋界説 55, 58
 読孟子界説 55, 58
 南海康先生伝 81f, 143, 260
 夏威夷遊記 126, 308, 333, 345
 鄙人對於言論界之過去及未来 356
 復陝西劉古愚山長書 64
 仏教心理学淺測 217
 文野三界之別 111, 113, 337
 変法通議 27, 40, 46, 48-60, 66, 110, 251, 300
 亡友夏穗卿先生 38, 53, 197, 302
 保教非所以尊孔論 30, 67, 202, 279
 戊戌政変記 36, 111
 訳印政治小説序 303, 310, 312, 314, 338f
 与嚴復幼陵先生書 42-48, 162
 余之死生観 212
 羅蘭夫人伝 273-281, 288f
 論學術之勢力左右世界 125, 166
 論学日本文之益 251, 258
 論教育当定宗旨 364, 371
 論支那宗教改革 176, 201, 206
 論宗教家与哲学家之長短得失 205
 論小説与群治之關係 304, 310ff, 338f, 364, 374
 論政府与人民之權限 102, 135-145, 154f, 158
 論中国學術思想變遷之大勢 68, 117, 174, 181, 195, 204, 236, 242, 248, 364f, 372, 397f

論中国宜講求法律之学 110

論中国国民競争之大勢及中国前途 235

論中国与欧州国体異同 234

論仏教与群治之關係 205, 364f, 374, 398, 402

論民族競争之大勢 120f, 245

和文漢読法 67, 124, 168, 251, 347

編者略歴

狭間直樹（はざま・なおき） 1937年生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学人文科学研究所教授。『中国社会主义の黎明』（岩波新書）、金沖及主編『周恩来』（監訳、阿吽社）、『データでみる中国近代史』（共著、有斐閣）、『世界の歴史27 自立に向かうアジア』（共著、中央公論新社）、『孫文と華僑』（共編著、汲古書院）など。

執筆者略歴

竹内弘行（たけうち・ひろゆき） 1944年生。名古屋大学院文学研究科博士課程中退。名古屋学院大学教授。『中国の儒教的近代化論』（研文出版）、『後期康有为論』（『五四運動の研究』第4 函所収、同朋舎）など。

村尾 進（むらお・すすむ） 1956年生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。天理大学国際化学部助教授。『カントン学海堂の知識人とアヘン弛禁論、嚴禁論』（『東洋史研究』第44 巻第3号）、『懷遠駅』（『中国文化研究』第16号）など。

石川禎浩（いしかわ・よしひろ） 1963年生。京都大学大学院文学研究科修士課程修了。神戸大学文学部助教授。『李大釗のマルクス主義受容』（『思想』第803号）、『東西文明論と日中の論壇』（古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所）など。

土屋英雄（つちや・ひでお） 1948年生。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程単位取得退学。神戸大学大学院国際協力研究科教授。『現代中国の人権 研究と資料』（編著、信山社）、『中国の人権と法』（編著、明石書店）など。

末岡 宏（すえおか・ひろし） 1954年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導終了退学。富山大学文学部助教授。『清末の礼学について』（『中国思想史研究』18号）、『梁啓超についてのルネッサンス』（『中国思想史研究』第19号）など。

執筆者略歴

森 紀子（もり・のりこ） 1945年生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。神戸大学文学部教授。余英時著『中国近世宗教倫理と商人精神』（訳注、平凡社）、『一九二〇年代の思潮と“鄉村建設理論”の形成』（『文化学年報』第18号）など。

森 時彦（もり・ときひこ） 1947年生。京都大学大学院文学研究科博士課程中退。京都大学人文科学研究所教授。『五四時期の民族紡績業』（『五四運動の研究』第2 函所収、同朋舎）、『データでみる中国近代史』（共著、有斐閣）など。

松尾洋二（まつお・ようじ） 1953年生。京都大学大学院文学研究科博士課程研究指導終了退学。仏教大学文学部非常勤講師。『曹錕呉佩孚集団の興亡』（『東洋史研究』第47 巻第1号）、金沖及主編『周恩来伝』（共訳、阿吽社）など。

齋藤希史（さいとう・まれし） 1963年生。京都大学大学院文学研究科博士課程中退。奈良女子大学文学部助教授。『〈小説〉の冒険——政治小説とその華訳をめぐる』（『人文学報』第69号）、『注釈漂荒紀事』（共編著、京都大学人文科学研究所）など。

山田敬三（やまだ・けいぞう） 1937年生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。福岡大学文学部教授。『魯迅の世界』（大修館書店）、『十五年戦争と文学』（共編著、東方書店）など。

井波陵一（いなみ・りょういち） 1953年生。京都大学文学研究科同大学院修士課程修了。京都大学人文科学研究所助教授。王国維『宋元戲曲考』（訳注、平凡社東洋文庫）、『曹寅について』（『東方学報』第59 冊）など。

中村哲夫（なかむら・てつお） 1942年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。学位：博士（文学、大阪大学）。神戸学院大学大学院人間文化学研究科教授。『近代中国社会史研究序説』（法律文化社）、『同盟の時代』（人文書院）など。

狭間直樹編

共同
研究 梁 啓 超

西洋近代思想受容と明治日本

1999 年 10 月 29 日 印刷

1999 年 11 月 10 日 発行

発行者 加藤敬事

発行所 株式会社 みすず書房 〒113-0033 東京都文京区本郷 5 丁目 32-21

電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社)

本文印刷所 理想社

扉・函印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© Hazama Naoki 1999

Printed in Japan

ISBN 4-622-03810-2

落丁・乱丁本はお取替えいたします

米国陸海軍 軍事／民政マニュアル	竹 前・尾 崎 訳	3500
東京裁判とオランダ	ブールヘースト 水 島・塚 原 訳	2800
東南アジア史の なかの近代日本	萩 原・後 藤 編	2800
<東>ティモール国際関係史 1900-1945	後 藤 乾 一	3000
劉 賓 雁 自 伝 中国人ジャーナリストの軌跡	鈴 木 博 訳	3800
ラティモア 中国と私	磯野富士子編・訳	3300
周 仏 海 日 記	蔡 徳 金 編 村 田 忠 禮 他 訳	15000
華 人 の 歴 史	バン・リン 片 柳 和 子 訳	4500

(消費税別)

みすず書房

謝 花 昇 集 伊 佐 眞 一編 5700

民本主義と帝国主義 松 尾 尊 允 13000

津 田 真 道 研究と伝記 大久保利謙編 9300

近代日本政党史研究 林 茂 12000

日本ジャーナリズム史研究 西 田 長 壽 8500

林銑十郎 満洲事件日誌 高 橋 正 衛解説 3800

戦時下抵抗の研究 1 同志社大学人文科学研究所編 5000

戦時下抵抗の研究 2 同志社大学人文科学研究所編 6500

熊本バンド研究 同志社大学人文科学研究所編 10000

(消費税別)

みすず書房